

臨床動作学研究 21 29-43, 2015

## 発達障害への治療的介入法としての動作法の効果 －エビデンスに基づく実践の視点から

執筆者

畠中 雄平

### 概要

動作法の自閉症スペクトラム（ASD）や注意欠如多動症（ADHD）への適用は、1980年代から行なわれており、理論的な展開とともにその臨床的な有用性についてそれを支持する多くの研究がなされてきている。しかしながら、動作法による介入が、発達障害の支援の現場に広く浸透している、とは言い難い現状がある。本研究では、動作法研究の中心的な役割を果たしている学会誌に近年掲載された、発達障害に関する論文を展望し、エビデンスに基づく援助効果研究の視点から検討した。論文は全 13 編で、すべて「リハビリテーション心理学研究」に掲載されたものであった。今回対象とした研究においては、動作法が発達障害に対して一定の効果がある、ということが前提になっており、「そもそも動作法が発達障害に対して有効であるのか」という介入の効果自体をリサーチ・クエッションとしてあげていたものはなかった。事例研究においても援助効果を標準化された量的な指標で調べることが必要だし、ケース・コントロールにおける対照群とコントロール群の選択にも明確な基準を示さなければいけない。今後は動作法の研究や実践においてもエビデンスの蓄積を意識していく必要があるだろう。